

海女の愛ちゃんが湯く!

# 伊勢山田傘復活応援の巻

皆様、お久しぶりです。元気に海女漁頑張ってます！

先日、第63回神宮式年遷宮に向けて5月に山口祭が行われるニュースを見ました。これから伊勢市界限は、ますますにぎやかになりそうですね。そこで今回のメルマガでは、その伊勢と鳥羽とを紡ぐ当振興会の事業を紹介することにします。

今年度からスタートするその事業は、伊勢に伝わる「伊勢山田傘」を活用した鳥羽温泉郷の新たなおもてなしを創造する事業です。振興会の事務局では令和6年度から3年間かけて、伊勢山田傘を会員のお宿に配布するよう準備しているそうです。何だか興味が湧いてきたので、事務局で傘の配布と一緒に同封する説明書を見せてもらいました。ふむふむ、なるほど、伊勢山田傘の伝統から使い方までしっかりと書いてありました。



昭和30年頃の現美鈴洋傘店（JR山田上口駅付近）の傘干場の様子。かつて山田に入ると伊勢街道に沿って山田傘業者が軒を連ねていて、お年寄りは「晴れた日に汽車で宮川を渡ると傘が一面に見えてな。山田に来たんやな～」と思ったそう。

その説明書の内容です。読んでみてください。

『鳥羽の地は古くから景勝観光と神宮参拝客の宿泊滞在拠点として栄えてきました。そして、そこには多種多様な宿泊施設（宿屋）が集積しそれぞれにもてなす文化も蓄積されてきました。また、鳥羽で捕れた魚介類を古来より神宮に神饌として奉納するなど長い歴史と伝統が今もなお受け継がれています。次期式年遷宮の諸行事も始まろうとしています。これからも神宮と鳥羽、そして鳥羽の宿屋との関係は切っても切れないものとして永久に続いていくことでしょう。』



製造途中の山田傘を見るカゾさん。  
とても気に入った様子でした。

そのため当振興会においても、将来を見据えより温泉地としての魅力を高め魅力ある宿屋を目指した取り組みが必要となります。観光資源を創造的に活用しそれぞれの宿屋がおもてなしの心をより一層高めることで宿泊客に満足度の高い滞在を提供していかなくてはなりません。その取り組みの一つとするのが「伊勢山田傘」を使ったお客様のおもてなしです。

伊勢山田傘は江戸時代から御師によって製造がはじまり伊勢神宮の参拝客に使われてきたものです。約 40 年前にその生産が途絶えましたが、昨今、その技術の承継を目指し復活に向けての活動がなされています。その活動の一環として、令和 6 年 2 月には鳥羽の大庄屋かどやで伊勢山田傘の展示が行われました。このことをきっかけに当振興会では、それぞれの宿屋でのこれまでのおもてなしに加え、伊勢山田傘を取り巻く文化や醸し出す風情を活かす取り組みをすすめ、同時にその復活を応援することとなりました。

配布説明書より  
伊勢山田傘の活用例



かつて鳥羽の宿屋では伊勢山田傘を「番傘」として使用していました。また、婚礼の際には末広りの形などから縁起物として結納品の一つである「迎え傘」や贈答品として用いてきました。この伊勢山田傘を鳥羽温泉郷の宿屋では玄関やロビーでの「迎え傘」として活用していただくようお勧めします。「傘 1 本を丁寧に使い、お客様を丁寧に迎える」鳥羽温泉郷ならではの新たなおもてなしです。

そして、この取り組みが“伊勢山田傘復活”につながる一助となること望んでいます。』



と、まあこんなふうです。

## 海女の愛ちゃんの取材

2月下旬、私は伊勢山田傘の復活を志す伊勢市の洋傘店「美鈴洋傘店」の四代目、鈴木俊宏さんを訪ねその思いを取材しました。鈴木さんは、令和元年から資料や文献の調査を開始し元職人との出会いなどを経て、5年の歳月をかけて、ようやく当時の技法をほぼ再現することができたとのことでした。

伊勢山田傘の素朴さや実用性は、華やかさよりも人々の生活に寄り添う温かみを感じさせるといいます。

一度途切れてしまった伝統の復活と継承に情熱をもってチャレンジするその姿は、私たちにも大きな勇気とヒントを与えてくれます。そして、途絶えた伝統を取り戻すだけでなく地域の歴史や文化を次世代に伝える大切な役割を果たそうとしています。



## 海女の愛ちゃんの感想

鈴木さんの話を伺い、私は自分たちの海女文化の現状と重ね合わせずにはいられませんでしたが、海女の技術や知識も時代の流れとともに失われつつあります。しかし、鈴木さんのように情熱を持って伝統を復活させようとする姿勢は、私たちにも大きな勇気とヒントを与えてくれます。職人さんの技術だけでなく、その心や感覚的なものを大切に、歴史、自然、そして地域との繋がりを深めていくこと。鈴木さんの活動を通じて、私たちも自分たちの文化や伝統を見つめ直し、未来へと繋げていく努力を続けていきたいと強く感じました。伝統の技や知恵を後世に伝えることはもちろん、私たちが生きる海そのものを守ることも大切です。海の資源があってこそ、海女の営みが成り立つ。だからこそ、文化を継承することと、自然を大切にするのは切り離せないものなのだと、改めて感じました。一つ一つ鈴木さんの思いが込められたこの伊勢山田傘を、迎え傘として鳥羽のお宿で、見れることを心待ちにしています。



## 鳥羽市観光商工課 後藤 洸の感想

今回初参加の鳥羽市観光商工課の後藤です。実は取材に行くまでは伊勢山田傘については認知しておりませんでした。また、和傘についても細かな違いなど知りませんでした。海に近い伊勢や鳥羽で使用する傘は強風対策として、骨太で曲がり具合も工夫されているとお聞きし、傘にも地域ごとの違いがありとても面白いと感じました。

鳥羽の温泉宿でも玄関に傘を飾っている宿があるとお聞きして驚きました。今回お会いした鈴木さんは、強い思いを持って伝統や文化を継承しようとするのは、伊勢志摩地域にとって財産になると感じたので、観光を担当する職員としても今後ともつながりを持っていけたらいいなと感じました。

## フランス人国際交流員 カゾ・ポーリンの感想

江戸時代にさかのぼり、山田傘の物語を知ったとき、この話を伝えることがいかに重要なことわかりました。あの和傘のデザインには、その地域の特殊性（例えば骨の太さなど）や当時の人々の生活様式が反映されています。それは、地元の人々が誇りに思うべき独自のアイデンティティを持っています。鈴木さんが昔の技術を記録し、保存したいと願っていることは、尊いものです。これは貴重なことであり、彼がこの使命を担い、この変わりゆく社会の中で伝統を継続させることを望みます。和傘は繊細であると同時に、普通に使える道具となっています。今後も続けてほしいです。



## 美鈴洋傘店

三重県伊勢市浦口1丁目17-1  
☎ 0596-28-6019

メンバー紹介

レポーター/写真  
大野愛子



東京都出身海女、フォトグラファー。来月から本格的に漁が始まります。もう海女歴10年です。ところで4月になると何か新しい事を始めたい方もいると思いますが、21日間続くと習慣化できるそうです。私は先月から読書に挑戦中です。

レポーター  
カゾ・ポーリン



フランス語で  
発信中！  
Fantastique  
Toba



鳥羽市観光商工課所属。外国人として日本の文化を掘り下げるとき、「雨傘、洋傘、和傘、迎え傘」のように、傘の使い分けを表す表現があることに驚かされています。フランス語で「迎え傘」を表す言葉は見つからないと思います！

レポーター  
後藤 洸



鳥羽市観光商工課所属。鳥羽市では、秋から冬にかけて旬を迎える「答志島トロさわら」が有名ですが、実は1年中旬の魚（海産物）が獲れます。観光客の方々にはそれぞれの時期にあった旬の海産物を食べて欲しいです。

イラスト/デザイン  
大西絵里奈



松阪市在住イラストレーター。愛ちゃんから送られてきた取材画像の中で、ひときわ目を惹いたのが伊勢山田傘とカゾレポーターの写真。あまりにも絵になる光景に、油絵のモデルをしてもらいたくなりました。